

外国におけるハーン研究

ハーンとアイルランドの作家たち

福澤 清

Lafcadio Hearn (1850-1904) の海外での現時点における評価は、どうなっているのでしょうか？ 2歳から約10年間、幼・少年期を過ごしたアイルランドでは、数年前、ダブリンの作家記念館に他のアイルランドの作家と並んで彼の記念額(顔写真)が掲げられるようになったが、アイルランド作家に対するような詳細な紹介・説明は無く、日本研究者として簡単に触れてあるだけである。記念額は、元駐日アイルランド大使、あるいは大使館に勤務したことのある人々のご尽力によるものであるが、彼らのハーンへのさらなる関心は、「ハーンおよび彼の作品の中に観察されるアイルランド性」にスポットをあてた論文集あるいは単行本として結実している。[Sean G. Ronan ed. (1997), *Irish Writing on Lafcadio Hearn*, Paul Murray (2000), *A Fantastic Journey* etc.]

また、ギリシャから母親とともに父親の郷里ダブリンに初めて移住して来た時に一時期、居住した親戚の家で、現在 Town House となっている Gardiner Street Lower の家、及び、Liffey 川より南にありハーンが大叔母 Sarah Brenane と一緒に住んだことのある旧居のうち2軒は、正面玄関にハーンのプラークが掲げられ顕彰されている。しかし、一般的に、今日でもアイルランドの人々の間でのハーンの知名度はかなり低い。同様の現象であるが、日本(熊本)でも良く知られている『妖精の女王 (Faerie Queene)』の著者、詩人 Edmund Spenser (?1552-1599) についても、この作品の創作されたコークの住民を始めアイルランド人にはほとんど知られていない。

ダブリン大学のトリニティ・カレッジ (1592年創立) のカレッジ通りバス停からダブリン

の南、ダブリン山麓にある Rathfarnham, White-church 行きのバス15C を利用すると毎日ハーンの旧居を垣間見ることになる。この旧居のある Liffey 川の南の地区は相対的に治安が良く、当時は裕福な人々が居住していた郊外の住宅地であるが、そのうちのひとつ Leinster 地区は今日ダブリン市内でも生活するのに最も便利な評判の良い住宅街のひとつになっている。驚くべきことに、Dubliners や Ulysses で馴染みのある20世紀最大の小説家といわれる James Joyce (1882 - 1941) の生家である Rathgar 地区の 41 Brighton Square West の家及び生後まもなく移り住んだ Rathmines 地区近くの 23 Castlewood Avenue の家、さらには、James Joyce の両親が結婚式を挙げた The Church of Our Lady of Refuge もこのハーンの旧居から歩いてすぐの所にある。James Joyce 一家はこの後、ダブリンの郊外線 DART の南方 Bray 地区から、アイルランド人の特性のひとつである「怠惰で酒好き」の父親のために 治安の悪い Liffey 川より北の住宅を10回近く引っ越して過ごすことになる。

ハーンと手紙を交わしたことのあるノーベル賞作家 William Butler Yeats (1865-1939) とともにアイルランド文芸復興に尽力した劇作家 John Millington Synge (1871-1909) も Rathfarnham のはずれの 2 Newtown Villas で生まれている。Riders to the Sea, Playboy of the Western World, The Aran Islands などの作品がある。TCD (Trinity College, Dublin) の学生時分からアイルランド語に関心を持ち勉強していたことと、パリで出会った Yeats の薦めがあってアラン島に住み着いて上述の作品を残すことになる。アイルランドの独立を標榜することで一致したため

ある。他方、Joyce は、Yeats とは行動を別にし、むしろ成熟したヨーロッパ人たらしとする。アイルランド性、アイリッシュ的なものを侮蔑し自ら好んでアイルランドを去りヨーロッパで生活しながらも(Self-Exile)、作品に関する限り、ダブリンに固執する、という極めて屈折した人生を送っている。

ハーンの場合、ジャガイモ飢饉 [The Great Hunger, 1845-1848] の際の多くのアイルランド人同様、自分の意志とは関係の無い大叔母の破産という理由で故国を去らざるを得なかった。結局、以後、二度と故郷の土を踏むことは無かったのである。

ハーンが日本の土を初めて踏んだのは、1890(明治23)年、40歳の時である。この当時、アイルランドはイギリスの植民地下にあり、ロンドンには多くのアイルランド人が住んでいた。著名なアイルランド人を3名挙げると、George Bernard Shaw (1856-1950), William Butler Yeats (1865-1939), Oscar Wilde (1854-1900) である。この3名は顔見知りで、特に先輩格の Wilde は、郷里の後輩二人の面倒をよく見、何かにつけ親切に遇している。Wildeの生家、育った家はTCDのすぐ近くにあり、Shawの生家もさほど遠くはない。後年、同性愛裁判で Wilde が不利な状況にあったとき、Shaw は Wilde に対し、有利な証言をして手助けることのできる立場にある時に積極的に救いの手を差し伸べなかったのは不可解である。幼少年期の地味で母親の愛情に飢えた、フランス語コンプレックスのShawと当時のダブリンの名士を集めてはパーティに明け暮れる派手な生活、服装も華美でフランス語にも長けていた Wilde との対照的な一面が関係したのであろうか。Shaw は、小説家になろう、と決意して1879年3月から9月まで毎日、単語数1500位の文章修行を己に課している。また社会を改善しようという意図からマル

クスの資本論について一生懸命勉強し社会主義者たらし、ともしている。また、英語のスプリングは合理的でないとして、修正案まで考案し一部実践も行っている。発音やスプリング面での英語への関心は、ミュージカル My Fair Lady (原題 Pygmalion) の花売り娘と言語学者 Higgins 教授の設定に具現されていると見なせる。TCD 近くのダブリンの国立美術館は、子どものいない Shaw の寄付に負うところ大で、今日、彼のレリーフが同館に飾られている。周知のごとく、Wilde は、牢獄生活を経た晩年、文無しで物乞い同然であったことを考えると人生の容赦無い過酷な運命について思いを馳せざるをえない。

この Wilde が人生絶頂の折、アメリカ講演を行っており、ハーンは、ニューオーリンズで新聞記者であったときに、同郷のよしみからか、この講演紹介の記事を2回ほど好意的に掲載している。しかしながら、Levee Literary s of New Orleans (1998) という小冊子によれば、ニューオーリンズの名士、文士である George Washington Cable (1844-1925) の家を Wilde が訪問したとき、Cable の子ども達は Wilde の奇抜で派手な服装、長髪にしきりに感心したが、隣人はそれに呆れかえって、後で Wilde のことを "fool" であると Cable に話したそうである。ちなみに、1882年6月の New Orleans の Grand Opera での Wilde の講演は、不評だったとのことである。

ハーンは、R. Welch (2001) The Concise Companion to Irish Literature によれば、オリエンタリスト、哲学者で日本文化、日本人の生活を賛美した、とある。オリエンタリストとあるのは、Some Chinese Ghosts [The Soul of the Great Bell, The Story of Ming-y, The Legend of Tchi-Niu, The Return of Yen-Tchin-King, The Tradition of the Tea-Plant,

The Tale of the Porcelain-God] という中国に関する作品もあるからであろう。哲学者である、というのは、Herbert Spencer や Charles Darwin, Percival Rowell に言及しながら、例えば、Japan: An Attempt at Interpretation などの著作を公刊しているため、と思われる。

アイルランド系アメリカ人（ノーベル賞等）作家

不思議なことに、アイルランドはSamuel Beckett(1906-1989), Shamus Heaney(1939-) というノーベル賞作家、詩人、古くはJonathan Swift(1667-1745) など著名な作家、詩人を輩出している。アイルランド系アメリカ人も含めると以下のような作家が浮上してくる。

William Faulkner (1897-1962)

Mississippi 州生まれであるが、両親は北アイルランドのUlster出身。Faulkner 家はDerryに多い名字。最初の詩集を出版したときに、本来のFaulkner というスペリングに戻す。James Joyceと同様、「意識の流れ」を重視。修辭的文体。ノーベル賞、ピューリッツア賞。

Eugene O'Neill (1888-1953)

New York 生まれ。両親はKilkenny, Tipperary からの移民。ノーベル賞、ピューリッツア賞。

John Ernst Steinbeck (1902-1968)

The Grapes of Wrathなど多数の作品。ノーベル賞

Margaret Mitchell (1900-1949)

代表作 Gone With the Wind でピューリッツア賞。

F. Scott Fitzgerald (1896-1940)

代表作 The Great Gatsby, Fermanagh

からの移民。

Pete Hamill (1935-)

New York, Brooklyn 生まれ。Belfast からの移民。日本人ジャーナリストFukiko Aoki の夫でもある。

ニューオーリンズにおけるハーン

ケルト系移民の多いニューオーリンズ [Celtic South]でのハーンの成果は、1) 2000 項目近くの新新聞記事 (ニュース) 2) たくさん の社説 3) 哲学、文学、宗教 (例えば voodoo教) 音楽、旅行に関する数百の書評 4) フランス文学の翻訳 [Theophile Gautier, Anatole France, Guy de Maupassant, Pierre Loti] 5) 詩 (集) への傾倒 [The Amateur Musician, The Fatal Plunge] 6) 自著の出版 [Stray Leaves from Strange Literatures(1884), Some Chinese Ghosts (1885)] 7) 多くの短編集および小説 [Chita: A Memory of Last Island (1889)] 8) フランス語、スペイン語系クレオール文化の研究Cuisine Creole (1885), Creole Cookbook(1901), Gombo Zhebes: A Little Dictionary of Creole Proverbs (1885) など。

したがって、「文化の翻訳者(Cultural Translator)」「比較人類学者 (Comparative Anthropologist)」と呼ばれることもある。中国語の勉強も試みたがこれは不首尾に終わっている。今日、当地でのハーンへの関心はいよいよ高まっている、と言えよう。

(ふくざわ きよし 文学部教授)